

FACULTY OF LETTERS

文学部生のリアルな！

# 字生生活

Vol. 65

13専攻・1プログラムから成る文学部の充実したキャンパスライフと、文学部ならではの多様な学びの情報を発信します。



文学部人文社会科学科哲学専攻4年  
静岡県立富士高等学校出身

こばやし しゅんすけ  
小林 俊介

## 「人生の意味」を 「くそ真面目」に考え続ける

本質を追求する思弁に基づいた論理的な思考の枠組み」といったものでした。しかし、これでも定義として不足している面があると思われれます。それでもこの3年間で見聞きしたことから哲学的な営みの共通項を抽出すると、概ね次のようなことが言えるでしょう。

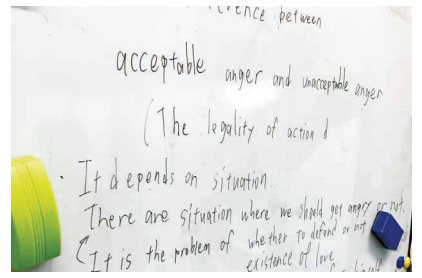
「哲学とは、まだはっきり答えが出ていないものの答えを、くそ真面目」に考え続けることである」。答えがないものについて考えるのは少し違います。答えが無いものについては答えが無いということを経験する。逆に、それが証明されていないのであれば、答えはあるかもしれない。ただ、まだわかっていないだけ。その有無も含めて考えるのが哲学です（無いと断言した上で考え続けるのは、ペガサスの内臓を解剖するようなもので、ただの妄想です）。さて、なんで私はこんなにもめんどくさいことに首を突っ込んでしまったのでしょうか。私の主たる関心は「人生の意味」です。

このテーマについて問題意識を持つようになったのは高校生の時でした。私は野球部に所属していましたが、毎日厳しい練習に追われていたにもかかわらず出場機会に恵まれず、なぜ苦しい思いをしてまで練習しなければならぬのかわからなくなっていました。それゆえに練習する意味を考え始めました。なぜバットを振るのか、なぜ試合で結果を出さなければならぬのか、その喜びにどんな意味があるのか、といった具合に。幸か不幸か地元は田舎で、自転車通学に片道40分かかったため、ぼんやりと考え続ける時間だけがありました。やがて食事する意味、寝る意味、勉強する意味といったようにさまざまな行動の意味を考え、そこから出たものの意味をさらに考えました。そのようにして考え続けると、やがて思いつくすべての行動が生存か幸福のいずれかのためであるということに収束しました。しかし生存、幸福の意味は考えてもわからず、意味は無いのではな

いかという疑念に行き着きました。それでも、少なくとも自分の身の周りに生きているほとんどの人間は、そうではないかのように生きているため、実際のところはどうなのだろうかという疑問を持つようになりまし。このような疑念から、「人はなぜ生きるのか」という問いが生まれ、この問題を解決させるために哲学を専門分野に選びました。

このような理由で哲学専攻に来たので、周りの哲学専攻の人たちもだいたい似たような悩みを抱えてきているのかと思っていたら、意外とそうではありませんでした。もちろんそのような人もいますが、動機は実に多種多様で、一番多いと感じるのは「中学、高校で読んだ○○○という哲学者が気に入ったから」というものです。一番びっくりしたのは「かつこいいから」です。いやいや、自分の将来を左右する選択をそれで決めるの!?!と驚きましたが、実際に存在するものは存在するので私は面白がって観察します。ほかにも仏教に目覚め部屋に沸くハ工を放置する人、資本主義に限界を感じ革命を訴える人、わざわざ編入してきた獣医師など、いろんな人がいます。哲学専攻だからといって誰もが変人ではありませんし、普通の人の人が多いです。しかし、変わり者（私もたいがいですが）の割合は間違いなくほかの集団より高く、ズレ方も

私が大学で学んでいるのは哲学です。しかし、「そもそも哲学とは何か？」という問いに答えることすら、いまだに難しいです。「哲学の哲学」なんて分野もあるくらいなので仕方ありません。それでも3年も向き合えばわかることはそれなりに増えますが、わからないことはその倍以上増えます。2年生で必修の「近現代西洋哲学史」のレポートでその答えを求められたことがあり、その時に出したのは「哲学とは、生きてさえいれば誰もが避けられない普遍的な物事



ESS 活動時の板書



春休み中でも大学に来てたからこそ見られた絶景



実家のごとき安心感のある金魚鉢

人それぞれなのでとても面白いです。勉強熱心な人も一定数いて、読書会という授業とは異なる学生主体の勉強会もよく行われています。知恵を出し合いながら難しい原著を丁寧に読解していくので、とても力が付きます。読む本を自分で選べるというのも魅力で、私もホッブスの『リヴァイアサン』と Thaddeus Metz 『MEANING IN LIFE』とで2度主催したことがあり、ほかにもいくつか参加したことがあります。哲学専攻の方にはぜひ積極的に参加してほしいです。

哲学専攻とは以上のように愉快なところですが、余程の興味でもない限り選びづらいところであるのも事実でしょう（実際のところは「中央大学」のブランド力を背景に安定した就職実績があり、実際に、多くの学生が着実に志望進路を実現しています）。なぜなら哲学は営利

活動と必ずしも親和性が高い分野ではないためです。ではこの資本主義の時代にわざわざ哲学を学んで何をするか？ となりますが、私の場合は大学院を出て研究者になりたいと考えています。「人生の意味」というテーマは学部の4年間だけで解決するには大きすぎるからです。

まずは卒論で「人生の意味」という議論の文脈における「意味」の語義を定義するところから始めます。議論の前に定義を確認する、という姿勢は私がこの中央大学で学んだ最も大きなものの一つだと思います。そのうえで「人生の意味」の有無を論じ（これをせずにいきなり「人生の意味とは何か」を問い始めると存在しないものについて議論してしまう危険があるため）、それから「人生の意味」がどのようなものか論ずる、というのが今後の私の大まかな研究計画です。その

学部だより

## AI時代の教養人

たまき あや 玉木 亜弥 社会学研究室

文学部には13専攻ごとに専門の図書室を備えた共同研究室があり、常駐するスタッフが教育・研究サポートをおこなっています。関係者の居場所としても機能しており、学部生・院生・教員が絶えず往来し、つながることができるハブのような場所です。

スタッフはひとつの研究室で数十年勤続してきた者も多く、一貫した立場から各世代の学生の変化を見つめてきました。パンデミック以降、かつては対面で行っていた課題提出・面談・問い合わせなどがWebで完結するケースも増えましたが、その中で近年顕著に感じられるのが、生成AIの登場によると思われる学生の行動・気質の変化です。

ChatGPTに語りかけるかのごとく、自身の所属や名を名乗らずに質問だけのメールを送ってくる学生や、妙に老練な文章を送ってくる学生がいます。また、教員との面談を連絡なしで欠席する、書類の提出が遅れても謝罪の言葉は添えない、といったこともまれではありません。文

学部はクラス担任制度や共同研究室があるため、他学部よりも学生と教員・スタッフの距離が近いことが特徴です。しかし、このような環境下でも相手が心を持つ人だということを忘れ、人間関係においてすら合理性や効率性を重視し、みずから思考しようとしにくい学生が増えてきたように思います。

文学部は昭和26年（1951年）に設立されましたが、その前夜、文学部の設置を望む学生の声が『中央大学新聞』（昭和25年3月20日号）に掲載されました。学友会文化部に属する文化科学研究会の会長であった宮本明氏（当時法3）は「大学はひとりの天才より百人の教養人を育てるところである」とし、文学部の必要性を訴えています。翌年の設立以降、文学部は幾度もカリキュラムを改変してきましたが、幅広い教養をもつ人間の育成がポリシーのひとつであることは今日も変わりません。

AIが台頭する時代にあって「教養人」とはなんでしょうか。文学部で過ごしながらか、ご子女に考えていただければ幸いです。



面談や授業にも利用される9階の社会学研究室

最終目標は、「あなたは何のために生きていますか？」という質問に、私が書いたものを読んだすべての人が何かしらの答えを用意できる理論を構築するという

壮大な野心です。これを実現させるために、今日も私は図書館の片隅か3号館の勉強スペース（通称・金魚鉢）でせっせと勉強しています。

